

ビバハウス便り NO. 101 ついにビニールハウス・パイプ組み立て完了！

2014年10月28日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

昨日からテレビのニュースのはじめには何度も何度も札幌から倶知安、ニセコなどに通じる中山峠に初雪が降るとの報道ばかりが目についた。案の定、今朝は余市でもちらちらと初雪が舞い始めた。いよいよ来るものが来た。待ち望んだものではないが、北海道に住むものにとっては、初雪は、新たな厳しい冬への決意と、不思議な安心感を与えてくれるものでもある。「さあ、この冬の厳しさに耐えて、それぞれの若者が、どんな成長を果たしてくれるのか。」春までの長い戦いの日々が開始されたのだ。

この厳しい冬にも勝ち抜ける若者就労支援策として、ビバハウスと NPO 風の学校との共同事業の第一弾として、ビバ・モンガク農場に約100坪のビニールハウスのパイプ組立作業が9月22日に完了した。これには2回にわたって、風の学校の長谷川豊先生の指導しているモンゴルからの農業実習生男女4名が懸命に作業をしてくれた。男女ともに気力、体力に溢れた彼らの渾身の頑張りがなければ、あれほど厳しい作業を短時間に完了する事はとても出来ない事だった。ビバ側の参加者からは、一様に、「あれでは将来横綱はみんなモンゴル人になってしまうのではないか？」との声が出たのも不思議ではなかった。

研修生とは、共同作業だけではなく、夕食も、ビバの若者たちとともにした。ジンギスカンの子孫たちだと、敬意を表したつもりで、「ジンギスカン・パーティー」にしたが、びっくりした事に、彼らは焼いた肉はほとんど食べた事がなく、モンゴルでは煮てしか食べていないとの事だった。

季節が本格的な冬を迎え、北海道ではこれまでの農作業がなくなり、若者たちは新しい仕事に挑戦し始めている。町内の温泉施設に応募したり、ドラッグストアに応募したものもある。又老人に対する各種のサービスを提供する事業所にも応募したりしているがなかなか簡単には決まらない。余市町の労務作業（公共施設の草刈や除雪など）に応募したものもあるので、現在結果を待っている。町の臨時職員として、NHK の朝ドラ「マッサン」（余市にあるニッカウキスキーの創設者・竹鶴政孝氏の愛称）ブームのお陰で毎日大忙しのビバ卒業生もいるので、何とかして後に続いて欲しいと願っている。

若者たちの就労がますます厳しさを増している現代日本への挑戦としての「共同事業」の存在価値がいやでも高まっていく事は明らかだ。なんとしてもビバハウスのこれまで培ってきた総力を結集し、多くの支援者の皆様のご支援をお願いし、1日も早く軌道に乗せたい。

最近母校北星学園大学が講師をお願いしている元朝日新聞記者の植村隆さんに対する誹謗中傷には目に余るものがある。苦境に立たされている母校と共に私も卒業生の一人として出来る事の全てをやりつくしたいと決意している。

